
亜鉛と愉快過ぎる仲間たち

長岡雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

亜鉛と愉快過ぎる仲間たち

【Nコード】

N1547K

【作者名】

長岡雅

【あらすじ】

亜鉛潤とその仲間が繰り広げる、コメディ+RPGのストーリー。RPGを軸にコメディを展開していくという一風変わった小説。尚、作者の身近な人間なら数倍楽しめるはずだ。

1 はじまりの書

とある水田地帯……。

その一画に2人の男がいる。

1人は、水の中に伏している。

気を失っているのだろうか。

もう1人は、健全(?)の模様。

どうやら、耳にある通信機器で、通信中のようだ。

「こちら、ズン。応答願いますズン。」

「こちら、本部」

「作戦終了、米の洗浄に成功。運び屋をよこしてくれズン。」

プツツ、

ツーツー……。

「切れたズン……」

どうやらこの男、本部とやらの人間には、嫌われている模様。必要最小限の会話しか、したくないようである。

……と、

その男の隣に、奇妙な光が現れた。

光は段々形を変えていき、

ついに人へと変貌した。

「米は？」

運び屋から野太い声が発せられる。

「こいつズン」

男は

傍らで伏しているもう一人の男を指差した。

すると、

運び屋はその男の首根っこを掴みそのまま肩へと担ぎ上げた。

そして、ボールペン大の機械を取り出し真ん中の赤い細長いスイッチを押した。

すると、再び光が現れ、

運び屋と男は光の中に入っていくやがて、光もろとも消えた。

「さて、帰るズン」

彼は瞬間移動ではなく徒歩で帰り始めた。

どうやら余程嫌われている為かわざわざ係の者が

『誤って』支給しなかったらしい。

彼の名前は、亜鉛潤。

亜鉛は化学式でZnである事と潤がズンじゅんに似ている発音の為、

愛称がズンとされている。

昼は高校生、

夜は秘密諜報機関の一調査員という具合に

二つの米（業界用語で顔や目標の意味を持つ）を持っている
要するに、二毛作（業界用語で二つの顔を持っている事を指す）を
行っている。

口癖は前述の通り、

語尾に「ズン」を付ける事

何故かは分からないが

彼の頭の左上部が見事に欠けている

例えるなら

精米した後のお米のような状態。

この事について尋ねると

本人は激怒する習性がある。

どうやら

コンプレックスに思っている模様。

要調査。

加えて、彼の顎もまた特異であり

常人よりも顎先が鋭く、

この顎を使って

敵を攻撃することがあるそう。

ある調査機関によると

彼の顎の角度は65.4度と

亜鉛の原子量の値と非常に酷似しており

（亜鉛はこの世界では最強の金属）

かなりの鋭さをほこるとい
結果を発表した。

数時間後、

ズンは7kmの道のりを歩き
ついに自宅へとたどり着いた。

「やっと着いたズン
いつも疲れるズンね」

…と、

彼の目の前にある女性が現れた。

「あら、ズンさん

米捕獲、お疲れさまでした」

彼女の名前は

早乙女米子さかづめまこ

ズンと会話しようとする
唯一の女性である。

彼女の出身地、経歴などは完全に不明
彼女自身もあまり話したがらない。
余談だが、ある調査機関とやらも
完全にお手上げとの事。

また、ズンに対して

丁寧な言葉を話すのも彼女のみ。

ちなみに彼女とは

ルームシェアをしている仲で

やや友達と言ったところ。

同じ高校の同級生である。

また、ズンが

秘密機関の構成員だという事は知らず

ズンが仕事している際は

パチンコをしていると言っている。

「ただいまズン、早乙女さん」

ズンはそう照れながら礼を述べると、

足早に自宅の中へと入っていった。

(今日はきつと良いことあるズン

何せ、帰ってきて早々

早乙女さんに会えたからズンね)

しかし、その気持ちは見事に裏切られた。

「おお、ズンじゃん

今日は勝ったか？」

男がズンに話しかけてきた。

チツ！

…ズンの舌打ち。

「ま、負けたズン…。」

「今日も大損ズン……。」

「またかよ！

じゃ、はい！」

と言うと、彼は手を差し出してきた。

条件反射の如く

ズンは、あらかじめ

自販機で買っておいた缶コーヒーを
男に手渡した。

男の名前は軒下京太のきしたきょうた

ズンとルームシェアをしている仲であり
同じ高校の同級生。

彼をいじめる事を趣味としている。

ズンがパチンコに行っているということだ

もしパチンコで勝ったら、

勝った分の商品を

負けたら缶コーヒーを

のきしたに差し出すことになっている。

どちらにせよ

ズンは得しないシステムのようだ。

「ヨーツス、ズン」

「よー、雅^{みやび}ちゃん

…ってお前何食ってんだズン！！」

「何って…、米粉ケーキだけど？」

「それは

俺が楽しみにしてたやつなのに！！」

「へー、そうなんだ。

まあドンマイ」

雅と呼ばれた男は

平然とした顔でケーキを食べ続けた。

「っておい！

ドンマイじゃなくて

食うのやめろズン！！！！」

半泣きの顔で哀願するがそれも虚しく、
雅は全て食べ切った後だった。

「『きつと』また買ってきてやるよ」

「そのきつとが
無いと最高なんだけどなズン…」

雅はのきしたや早乙女と同じく
ズンとルームシェアをしていて
同じ高校の同級生。

基本ズンをからかうのが好き。
だが、極々まれに
ズンに対して
優しくする時が無いわけではない。

また、ズンが所属している部活は
野球部なのだが、
その次期キャプテンを努めている。

「やつほぐ、騒々しいな。
ズンがついに亜鉛となったか？」

ここからは
ドラクエの戦闘シーン風でお送りします
男三人組が現れた！

ズンはどうする？

たたかう 目標：火練かれん

ズンの攻撃！

しかし火練は平然としている。

火練は何やら準備をしている…。

ベホズンの攻撃！

「ズンズーン、じゃあな!!」

彼はトランプの10を三枚広げた！

ズンに6、538、000、0000のダメージ!!

しかしズンは耐え抜いた。

瀬川せがわは、ぼーっとしている。

火練の準備が整った！

火練は「三浦としを」を呼び出した

「三浦としを」は

全人類に精神的苦痛を与えるべく
生み出された地上最強の生物

(ゴリラに似た形状をしている)

但し今の場合、

偽物の三浦としをなので

そこまで強くない。

三浦としをの口撃！

「うお~~~~い!!!」

ズンは即死した。

火練は経験値を1、手に入れた！

ベボズンは経験値を1、手に入れた！

瀬川は経験値を20、000手に入れた！

火練は1レベルアップした！

ベボズンは1レベルアップした！

瀬川は変化していないようだ…。

「ってなんだズン!？」

「このクソゲーはッ!？」

「最高の出来栄じゃんと、火練。」

彼らの名前は前述のように、
かみじょうかれん
神条火練

ちなみに意外かもだが、男である。
PCを自在に操り、

軽々とハッキングだつてこなす
ブ○ッディ・マン○イの
高○藤丸クンも真つ青だろう。

ベホズン・i t イット

カタカナと英単語のまさかの融合。
ちなみに名字はi t。男。

瀬川 せがわ

名前は不明。

よく今までの登場人物と行動を共にする。性別は女性。実は軽く美人。

「あ…、そろそろ学校に行かないと
遅刻するズン！！！」

やばいズン！！！」

その言葉が発せられた途端、
全員が一斉に時計へと目を向け
そして慌ただしく動き始めた。

全力ダッシュで高校へと向かう一同。
彼らが通うのは私立亜鉛学園。

中高一貫校で共学である。

高校の周辺の地域には

結構名の知れた神学校で

有名大学神学者を多数排出している。

物語はここから始まるのだ・・・。

ズンは、所詮ズン。

「現在の状況を報告せよ」

年老いてはいるが

大柄で筋肉隆々の男が命令した。

「はっ！まだしばらく

かかる模様でございます」

「貴様…確かモーホとか言ったな、

この私が自ら手を下してやるうか」

「ありがたきお言葉、

されど、私は若輩者の身より

身に余るか…」

「そうか、それは残念」

「では、私はこれにて」

「ああ」

モーホは部屋から出ていった。

男は机に肘を付き、

どうすれば、やれるのだ…？

と、不明な事柄を考えていた。

所変わって、亜鉛高校。
チャイムが鳴り響いている。
どうやらこの日の授業は
全て終了したようだ。

「まずいズン」
ズンの顔が青冷めている。

「どした？」
ついに酸化する気になったか？」
と、i t

「来るズン！」

「なっなんだと！
ついに地球の破滅が起きるのか！？」
明らかかな、おふぎけ口調で話すi t
しかし
ズンの耳には入っていなかった。

ガラッ！

教室のドアが開けられた。

続いて、

ズカズカと男が教室に入ってきた。

「はい、亜鉛とi tは

ホームルーム終わったら

職員室に来い！」

…この先生だった模様。要調査。

「ある意味、破滅だ…」

放課後。

ズンとi tは職員室の前に立っている。

「行くズンよ？」

「お、おう」

「早めに終わらせろよ」

その声の主に

ズンは耳を疑った。

なんと

ルームシェア仲間が勢揃いしている。

「…i t、提出物は

ちゃんと出せよ」

何か聞こえる…。

「みんな…ボクの事を

待っていてくれるズンか？

今までそんなこと一度も無かったのに
軽く涙目になるズン。」

「・・・はい。

すみません、先生」

また何か聞こえた。

「よしi t、いくズンよ！」

意気込むズン。

さながら

ヒーローの映画の1シーンのようだ。

ガラッ！

と、職員室から

i tが出てきた。

「え？俺もう終わったけど？」

「ズ……………ン」

どうやら、彼はヒーロー映画の中では
雑魚敵の一人だったようだ。

「じゃ、帰るか」

それに賛同する一同。

イラッ…！

「怒ったズン…。

くらえッ！亜鉛ブレー……………」

「お前はコツチだ！」

どこからともなく伸びて来た右腕が
ズンの頭を捕らえた。

「ギヤアアアアアアアア！！！！！！」

彼は職員室に引きずり込まれて行った。

「ご愁傷様…

まあでも…………、

ズンだからいつか」

のきしたの言葉は

そこにいる全員をうなずかせた…。

秘密機関、更衣室

「絞られるだけ絞られたズン……」
彼は仕事着に着替えている。

「お、ズンじゃん」

…なんて言う人間はここにはいない。

彼はとことん嫌われているから。

しかし何故かは誰も知らない

とりあえず、ズンを嫌う。

Aさんの証言によると
こういふことらしい。

「よくわからないけど
とりあえずズンは嫌いなんだよね

理由？バカ言っちゃいかんよ。
彼を嫌うのに、
理由なんているのかい？」

ついでにBさんの意見も…

「やめろズンツ！」
ズンが叫んだ。

よほど悲しんでいるみたいだ。

……………。

「さて、今日の米は…っつと」

本部内に設置されている
モニターの画面に触れた。

すると、

指紋認証 | complete |

と、画面に現れたかと思うと
続いて、

1人の男の顔写真とその経歴、

今現在どこにいるかを

リアルタイムで表示している。

これによると、

男は現在、伊東自動車道を

亜鉛車で南下中だそうだ。

「亜鉛車…、装甲車の一種ズンか。

そんな車使ったら

目立ってしようがないだろうズンに…

敵組織は一体

何考えているんだろうズンか」

そう独り言をつぶやきつつ

ズンは外へと歩き出した。

亜鉛自動車道

何十もの車が行き交うこの道路。

その中には

ズンの標的になっている車もあった。

「我らは

完遂せねばならない…」

運転手の男は何事かを
つぶやいている。

「我らは…、我らは…」

何度も何度も同じことを
つぶやいている

よくみると、この男、
目の焦点が合っていない。

何者かに
操られているのだろうか…？

「あれズンね」

亜鉛車の後ろに
ズンが追いつくことに成功。

なんと、驚くべきことに
ズンは自身の足のみで
亜鉛車に追いついている！

亜鉛車の現在の時速が
30km/hに対して

ズンの現在速度が
なんと65.4 km/s!!

…もはや人を超えている。

というか、人じゃなかった、彼は米だ。

…それはさておき、

ズンは、頭から

白い刀状のものを取り出した。

「ボクの愛用武器、
デンプンソードをくらえ!!」

ズンはそれを亜鉛車の
タイヤへと突き刺した!

「ウオオオオオオ!!」

無駄に迫力がありそうで

実はまったく無い

ズンの咆哮とともに

タイヤを見事に切り裂いた!

アスファルトと車輪との間の
クッションが消えたたん、

車輪から火花が飛び散る！

やがて車輪さえも外れ、
バランスを崩した車体は、

派手な音と豪快な火花を
撒き散らしながら横転し、

停止した。

「はあはあ…、
やったズン」

…ズンごときにこんな簡単に
亜鉛車を壊させていいのだろうか？

「ん？いま何か
聞こえた気が…？
気のせいズンか？」

ユラリ・・・、

「ズン?!?!?」

運転手と思われる男が
車内から姿を現した。

頭からは
大量の血液が流れている。

なのに痛がる素振りを
まったく見せていない。

ゴクリ・・・。

緊迫した空気が
その場に満ちている。

すると、
急に男はドサツ！と
その場に倒れた。

まるで、糸を切られた
操り人形のようなだ。

「なにが…？」

でもとりあえず、

任務は完遂したズン」
ズンは

通信機器のスイッチを入れ
本部と連絡を取ろうとした。

と、突然ズンの真横に
光が現れ始めた。

その光は徐々に形を変え
やがて

いつもの運び屋が現れた。

「いつもより

対応が早いズンね

今日は一体何が…」

何か様子がおかしい。

現れた運び屋は

頭から

血を流しているではないか！

「だ…めだ、

本部…と連…絡を

取っ…てはいけ…ない」

運び屋の弱々しい声が

ことの重大さを

物語っている。

「どうしたズンか！？」

「何があつたズン！？」

「奴らが…」

ザシュッ！！

収束しかけていた光から
突然ヤリが飛び出し、
彼のケツを貫いた！

「あああああゝ！！！！」

運び屋は断末魔の叫びと共に
命を失った。

ズンは
運び屋のケツに
突き刺さったヤリを
抜いてやった。

「これは…」

ヤリは男性の陰茎と
全く同じ形をしており、
最も先端に……、

「モホホ団……？」

と、記してあったのだ……。。

ドラズンクエスト???

男の子

二人に囲まれている。

「ハハハ……！」

見るよ、コイツ……！」

やめる……。

「アハハ……ッ！！
キモ……ッ！」

やめてくれッ！

ジャラ……。

は……ッ!??

男は目を覚ました。

「ここは……？」

「どこ……だ？」

暗い場所……。

まるで

太陽の光を嫌うかのよう

一筋たりとも光が入らぬところ。

地下なのだろうか？

ジャラ…。

どうやら四肢全てが、

鎖のようなものに繋がれているようだ。

その為

バンザイの格好を強いられている。

そのおかげか、はたまたそのせいか、
肩が完全に凝り固まってしまっている。

「誰か…いるか…？」

小さく呼び掛けてみた。

…何の反応もない。

「…は…、どこだ？」

問題です、どここだ？

A・Mの人専用、

快楽を求めるための部屋

B・逝っちゃった人専用

楽しむための部屋

C・ズンと65・4という数字との

関連性や規則性について

勝手に想像するための部屋

所変わって…、

「ズンだズン！」

毎度お馴染み、

留年しそこねた……失礼、

65・4が大好きなことを

心の中でアピールしまくってたら

先生方に奇跡的に通じて

さらにあまりにも感動した為

留年させなかった、

という伝説を多分もつズン。

現在、本部付近にいる。

「これから隠密行動を開始するズン

落ち着けズン、ズン」

すうッ……、

大きく息を吸うズン。

ここからは

ドラクエ風にお楽しみ下さい

ダンジョン：本部ー外

ズンはメニューを開いた。

しらべる

魔法

道具

特技

思考（選択出来ません） ステータス

特技一覧（MP 65・4 / 65・4）

仲間を呼ぶ（仲間が存在しません）

変装（MP：999）

あたりを見回す（MP：65・4）

グチる（MP：0）

汚染米ブレイク（敵がいません）

俺が……補習だッ！！（MP：3）

メニューに戻る（MP：65・4）

ズンはここから、

何も出来ないことに今さら気付き、

「メニューに戻る」を選択した。

…、MPを全て消費した。

しらべる

魔法

道具

特技

思考（選択出来ません） ステータス

しらべる一覧（MP00.0/65.4）

ズンズン！じゃあな！！（MP：0）

メニューに戻る（選択出来ません）

な…、なぜだ…ズン。

いや、まだ手があったズン！

ズンは電源を切るを思いついた！

しらべる一覧 (MP00・0/65・4)
ズンズーン！じゃあな！！ (MP:0)
メニューに戻る (選択出来ません)
NEW!電源を切る (MP:0)

電源を切るを選択したはずが
なぜか作動しない。

ボンッ！

怪しげな効果音と共に
新たなワードが追加された。

しらべる一覧 (MP00・0/65・4)
ズンズーン！じゃあな！！ (MP:0)
メニューに戻る (選択出来ません)
(ズンの)電源を切る (MP:0)

な…、なぜ…なんだ…ズン。

ズンは必死の抵抗を見せる！

しかし矢印は動かない。

すると

強制的に

「（ズンの）電源を切る」を選択。

なんと、

「ズンズーン！じゃあな！！」発動！

途端にズンは自爆したッ！

ズンズーン！！ 効果音

訳の分からん効果音と共に
ズンは消えていった。

ちなみに

ズンの爆発による…、

死者：0

重軽傷者：0

無傷者：地球上の全人口

何でもいから被害を受けた物：

ズンの体に付いていた

微生物（主にノミ（9割が頭の中に在住））が

居場所を失い、

ホームレスになった事ぐらい。

とりあえず

意味不明！！

所変わって…

故ズンの元・住居

ズンが居なくなつて3日ほどたった。

…が、

ルームシェア仲間の
誰一人として気付いていない。

…そこに

死んだはずのズンが
半透明の青色の体となつて現れた。

『としを』があまりにも
地獄の世界に存在していて
(平均して5秒に1回は必ず会う)

会うたびに

数学のテスト（いつも35点未満のモノ）を見せつけるように掲げながら

「うお〜い!!」

い〇うツ!! 追試だあ!

ウホウホモホウホツ!!」

とか叫びながら

追いかけてくるので、

さすがに神経衰弱となったズンは

急いでお釈迦様が垂らした

クモの糸につかまって

逃げて来たというわけだ。

余談だが、

よく数学で高得点を取る者が

この状況におちいると

モンハン

（正式名称（？）：モンキーハント）
を楽しむことが出来る

自身の命と引き換えに

日頃のウツプンを晴らす事が出来る

ぜひお試しを

~~~~~

（か、悲しすぎるズン…。）

仲間たちは何も知らず、  
リビングでくつろいでいる。

（よ、よしこうなったズンのなら…）

ここからは

ドラクエ風にお楽しみ下さい

ルームシエア仲間たちが現れた！

ズン 特技 ズンスーン…じゃない。

ズンは行動をキャンセルした。

（あ、焦ったズン…）

ルームシエア仲間たちのターン。

I7の攻撃、

チェンジ ザ サブジェクト！！

（話題を変える）

「そういえば、ズンって  
今どこでなにしてんの？」

会心の一撃!!

ズンの精神のHPが6・54回復した!

(ナ、ナイスズン、エセ)

思わず泣きそうになるズン。

火練の攻撃、

チェンジ ザ サブジェクト、リターン!!

「それよりさあ、

このカレーうまくね?」

そして、火練はカレーをほおばる。

究極の一撃!!!

ズンの精神HPに5のダメージを与えた!

(カ…、カレー……………。  
カレーに負けたズン……………)

ズンの精神HPは0になった。

ズンは力尽きた。

…が、すでに死んでいた。

……………まあ、いいや。

それは突然のことだった・・・

ドンツ！ドンツ！ボタンツ！！

何かが破壊される音が響くツ！

平凡な日常などもろいものだ。

ドタドタドタドタ……。

大勢の人間の足音が、  
リビングへと続く廊下で鳴り響いた。

彼らは平凡を破壊する者たち  
なぜなら、彼らは  
非日常に生きているから……。

「ケツをあげるッ！……！！！」

「ケツッ!？」

…そのギャグ、

新しすぎてついていけねえ…」

雅の不明なツッコミ。

さあ！

ツッコミ審査員ことズンの評価はッ!？」

「50点ズンね

キレがまるで無いズン」

なかなかの辛口ぶりですね。

さすがツッコミ王ズンです。

~~~~~

「フッ……」

鼻で笑いながら、
二人の男が前に歩み出た。

「なんだかんだと聞かれたら、
答えてあげるが世の情け！」

「いや、聞いてないツス」

「エエのツツコミが冴える！」

「おいしいズン。
かなりおいしいズンね。
まあ98点が妥当ズン」

男二人は構わず続けた。

「愛と真実と悪をつらぬく、
ラブリーチャーミーなカタキたち。
ム〇シ！！コジロ〇！！」

銀河を駆ける
モホ団の二人（とその他大勢）には
ホワイトホール、

白い明日がまってるぜ…」

「それ…片方、女じゃなかったか？」

のきしたのツツコミ炸裂！！

ズンの評価は！？

「ななじゅ…」

火練の奥義、

『エネミーコントローラー』発動！！

火練はAボタンをおした。

強制発動…、

『ズンズーン！じゃあな！！』

頭が欠けている理由？
成長することが、できないからズン

…それが、断末魔の叫びだった。

ズンズーン…！！！！ 効果音w

「フツ…、
これで
やっかいな顔芸は封じられました」

「キサマら！
我らを差し置いて
何をしている…！」

「そんなこと…
言っちゃいけないよ、ハニー」

ハニー?? (・。・) (

火練たち全員にこの疑問符が浮かんだ。

「あらやだ。

ごめんなさいね、ダーリン」

「。。。」「ダーリン!?!?!?

（コイツら…男同士だよ…な？）
と雅。

あれか…、ゲイか…。

みんながみんな
同じことを思っていた……。

場の不穏な空気を感じとった二人は

ついにキレた！

「紳士、淑女諸君、

…まあみんなどっちにもあてはまるけど
捕まえてやりなさい！」

「ゲッ、マジかよ…」

のきしたの

むなしき声が響くと同時に
戦闘が開始される。

~~~~ここからはドラクエで。。。

モホホ団が現れた。

火練の攻撃！

『レジェンド・オブ・としを！』！』

なんと、

どこからともなく  
「としを」が現れた。

その形状はまさしくゴリラ  
なおかつ、

右手にはオリジナルソード

(原料：とりあげたPSP、

とりあげた遊戯王カード、

とりあげた携帯、

etc...)

左手にはなぜか

ズンズーン！じゃあな！！

を発動して話題から消えたはずの

ズンが握られていた。

としをの攻撃！

アルティメット・汚染米ブレイク！！

モホホ団にズンを投げつけた！！

全員に0・654ダメージ！

ズンはどこかへと消えていった…。

イトの攻撃！

「ロード・カン（『缶』卿）」！！

100円玉を取り出すと  
それで缶ジュースを買った。

プシュッ！

ゴクッ！

……。

「マズイんだよ……！！！！」

イトは缶を投げつけた。

ヒュンッ！

ドゴオン！！！！！！

モホホ団の一人に5000ダメージ！

ついでに缶と共に消えていったとき。

結果：

カン>ズン

雅の攻撃！

『なにもしない』発動！

「まあ…、頑張れよ」

全員の攻撃力・防御力が30下がった。

のきしたの攻撃！

『ズンといっしょにあそびましょ』発動！

のきしたは話題にズンを呼び戻した。

そして、ズンの顔をつかむと

ブンブン振り回し始めた！！

追加発動！

『ジャイズント・スウィンズン』！！

のきしたの活躍により

敵全体に5000ダメージ！！

忘れててごめんね。瀬川の攻撃！！

『人にはギャップというものがある』

発動！！

かめはめ波！！

青白い光があたりをつつんだ…。

敵全体に500………000ダメージ！！！！

モホホ団をやっつけた！

火練は経験値を100、手に入れた！

イトは経験値を60、手に入れた！

雅は経験値を200、手に入れた！

のきしたは経験値を100、手に入れた！

瀬川は経験値を5、手に入れた！

ズンは経験値を

100………000手に入れた！！

火練はLv・2に上がった！

イトはLv・2に上がった！

雅はLv・3に上がった！

のきしたはLv・2に上がった！

瀬川はLv・が上がらなかった。

ズンは………

上がったかどうかは定かじゃない。

こうして…、

モホホ団を撃退することに成功した。

時代は激動の最中であつた…。

今回わかつたこと

カン>ズン

「これ、テストに出るぞ」手に入れた！

のきしたは経験値を100、手に入れた！

瀬川は経験値を5、手に入れた！

ズンは経験値を

100………000手に入れた！！

火練はLV・2に上がった！

イトはLV・2に上がった！

雅はLV・3に上がった！

のきしたはLV・2に上がった！

瀬川はLV・が上がらなかった。

ズンは……………

上がったかどうかは定かじやない。

こうして…、

モホホ団を撃退することに成功した。

時代は激動の最中であつた…。

今回わかつたこと

カン>ズン

「これ、テストに出るぞ〜」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1547k/>

---

亜鉛と愉快過ぎる仲間たち

2010年11月15日09時03分発行